
雪時々吸血鬼

燈 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪時々吸血鬼

【Zコード】

N5357BA

【作者名】

燈 優

【あらすじ】

吸血鬼拾いました。

（ブログ掲載済）

「いやあ俺吸血鬼なんだよね。」

「は？」

家の近くの公園で。なぜかこの冬真っ只中の1月に。半袖Tシャツに短パンという。素晴らしい季節と気温と空気を無視した行き倒れ男を拾つて帰り、とりあえずレンジで暖めたホットミルクを渡した瞬間言われた言葉がそれだ。

「いやあ俺吸血鬼なんだ。」

ついさっきまで死にそつた顔して公園のベンチに平行に突っ伏して倒れていた。くせに。

「ふうん。じゃあこれいらねえな。」

「ああああ飲む飲む飲みますごめんなさいっ！！！」

ちょっとコンビニ、と。それだけなら暖房切らなくともいいかと点けっぱなしで出ていた暖かい部屋に運んだ瞬間。

「はー・・あつたまるねえ・・」

元気一杯あん〇んまんとばかりに復活した男。

「ふうん。」

吸血鬼って変温動物なのかな。俺の頭にまず浮かんだことはそれだった。

見ているこっちが寒いと、半ば無理矢理着せた俺のシャツにセーターにデニム。俺もそう背が低い方ではないのにどれも少しづつ短いことがむかつくが、まあ着れてよかつたとのんきにテレビを見ている自称吸血鬼に話しかける。

「あんた、何であんなトコで行き倒れてたの。」

「ああ俺ねー寒いのダメでさあ、どうしても冬は引きこもりがちになるんだけど今年は家なくしちゃってねー。」

あはははとテレビに笑っているのか話に笑っているのか。判然と

しないながらも一応答えが返ってきた。

「今年は？」

「うあえず氣になつたところを訊いてみる。訊きつつも俺はさつ
き「ハンバーで買つてきた肉まんとおでんを「じんじん」と袋から出しか
ぶりつく。それに氣付いたのか自称吸血鬼が犬や猫ならぴょんと耳
を立てたである「アクションをしてずつずつしくも狭い炬燵に入
つてきた。

「そう。今年は。いやあ参つたよねー、昨今の不況の嵐!一百年に
一度とか言われてるけどさー。俺こんな不況経験したの2回目だよ
全く。」

喋りながら今しもよだれを垂らしきつた勢いで俺の食つている肉
まんとその手前で湯気を上げるおでんを凝視しているから。

「・・・食ひ?..」

そう声をかけてみればさも嬉しげにいつただきまーすと牛筋に箸
をのばした。

「つか、2回目? あんたいくつ?」

肉まんともうひとつ買つた中華まんを差し出すときりりと音が
聞こえてきそうな顔をして受け取りがぶりと勢いよく噉み付いた。
吸血鬼つて雑食?

「ほう。ひはいめ。おくひゃんひゃふひゃんひゅうひひゃー。」

「・・・食い終わつてから言ふ。」

「・・・つくん。そうそひー、一回目なんだよねえ。俺昨日で三百

三十一になりました」「ひー

「ふうん。じじいびじんじやねーな。」

「んにやくをつつきながら思つたままを言えば。自称吸血鬼はち
よ、こんな美青年に向つてじじはないでしょじじいは、と牛筋の串
を持つたままご立腹とばかりに手を振り回してくる。まあ確かにじ
いさんはこんな怒り方しねえな。むしろガキか。

「おい、危ねえ。串置け、汁が飛ぶ。」

「あ、じめん。」

「んで？自称吸血鬼の自称御歳三百オーバーの自称美青年は何で公園のベンチと仲良くおねんねしてたわけ？」

コンビニおでんを男一人でつつくというむなしい情景の中、自称吸血鬼は今度は卵を一口で食つたらしくも「も」と何か言つていうよつただ租借しているような。

「・・・食い終わつてから言えよ。」

「もー。」

じくんと頷いたそいつに俺これじゃあ母親みてヒジやねえかよと内心溜息を吐いた。

「んで。由緒あるはずだつたらしいロッククロウ・ディアレフトリヒト・ディクトリアス？？せさんば。吸血鬼だとばれないように時々場所を変えながらその国その土地で生活していたが今回の不況の波に負けて勤め先だつた某大手企業からリストラされ、それまで住んでいたところはひつそりと血をもらつために女のひも状態だつたため自分の家はなく。しかもリストラされたことが原因かどうかは知らないが先日その女の家も放り出され他に行く当てもなかつたからとりあえず公園に行つたら空腹で倒れた、と。」

ぱちぱちぱちぱち。

おでん食つたり風呂入つたりと間にいくつか挟みながらやつと聞き出した内容の要約である。風呂上りに渡したトレー・ナーに着替えたやつはのんきにぱちぱちと手を叩き炬燵には蜜柑という最早使命感すらあるそれをもすもすと食いながら俺の渾身の要約を聞いていた。

「すごいねえ十夜くん。俺の支離滅裂な話をきれいにまとめてくれたねえ。」

「ここにこと蜜柑をほおばるロッククロウ（略）」、話下手なの自覚してやがつたのかとぴくりと青筋が立ちそつになる。まあ三百年も生きてりや否が心でも内省性は高くなるか。

「んで。とりあえず倒れてたから拾つたけど。お前、どうすんの。」

出でつてくれればありがたいことこの上ない。

出でて、下へ下へ木林にありかたはしことこの「がい

「へーん。でもリストでそれちゃつたしなあ。家もないしねえ。

蜜柑の甘酸っぱさが程遠い。味のしない蜜柑を租借していると携帯が振動している。光っている表示を確認しうーんうーんとうなっているロッククロウ（略）は放置し通話ボタンを押す。

卷之三

お前も不機
変なことに巻き込ま
れるな・・・・・・・・・・ああ。そう・・・・・・・・・・あー、今
悪いな、ちょっと吸血鬼拾つちまつて。ん? ああ大丈夫大丈夫。血
い吸われたわけじゃねえから。・・おう。・・・・ああ、またな。」
び。と。大学に入つて知り合つた友人との電話を切つて顔を上げ
ると。

一
•
•
•
何

真面目な顔をしたロッククロウ（略）の顔が至近距離にあつて若干引いた。

スケルトンの死

イアレフト

「口うで良い。」

本名全部言っかけたら突っ込まれた。
愛称なのがまあ俺もその
方が楽でいい。

問題あつたか?

「NO! 」とばかりに両手で頭を抱え仰け反る。それはどん風なリアクションなんだろう。そのままの体制で数秒止まつた後、がばりと勢いよく頭を戻し俺に詰め寄つた。

「大有りだよ十夜くん！…だつて今この現代に吸血鬼が生存して
るなんてことが知られたらどうなると思つてんの！…一族郎党捕ま
つてもれなく解剖されて研究されてそれでマニアなひとたちに長寿
の秘訣とかを根掘り葉掘り訊かれちゃつたり忌み嫌われている種族
だから十字に結ばれた木の杭とかで心臓貫かれて大量虐殺みたいな
ことになるじやないかつ！」

魔女狩りがあつてぐらごにひどくなるに決まつてるじゃな
いかつ！！

そう一息に言つとさすがに息が切れたのか。ゼエはあと肩で息を
しながら口ウはばぐつたりと炬燵の机に頭を伏せる。俺もその勢いに
押されて思わず引いていた身を戻し、ああなるほどと上下する口ウ
の頭を見た。

「まあ、ダイジョブじやね？」

言つた瞬間何を悠長な！！と鬼の形相、いや、吸血鬼の形相？で
口ウが顔を上げる。俺は再び引きながらも、

「大丈夫だと思つぜ、さつきの電話、千壽つてやつなんだけど。
まあダチなんだが、あいつも大概変なことに遇つやつだから。さつ
きもなんか面倒があつたみたいだし？んな言いふらすやつじやねえ
よ。」

だからそんな気にはしないよ。

言えぱじとーつと効果音が聞こえてきそうな顔で俺を睨む。あの
なあ。

「つうか、だつたら何で俺に言つたんだよ。」

「へ？」

「自分が吸血鬼だつて。」

「！？」

何その今氣付きましたみたいな顔。つうか今氣付いたのか。実は
阿呆なんじやないかこいつ。三百年生きてて。いや、逆に生き過ぎ
てぼけたとか？

俺がそんなことを考へるとは露知らず。口ウはあつち向いたり

こちちむいたり首から上を世話をなく廻らせ言い訳か何かを考えて
いるようだ。しかし首から下はすっぽりと炬燵に収まつてゐるところを見るとどうも出て行くという選択肢は皆無らしい。

いいいや、ほら、俺も。ちよつと仮死状態手前までいこうやつてたからさ。ほら、ね。ハイテンションになつちやつてたんだよ、ね。だからひこぽりつと・・

な。堂々としたもんだ。」「

卷之三

に噴出してしまった。

卷之三

ひぐりと肩を震わせて上目遣いで口が恐る恐る感じた感じで俺を見る。そこで俺は初めてロウの眼がほんとうは灰色なのに気付いたんだが、このときの俺はおかしさの方が勝っていた。

「んな、真剣に考えなくたって構わねえよ。どうせ行くあてもねえんなら、しばらく俺んちに居ればいいしな。一人暮らしのアパートだから」見の通りの狭さだが。

きょとん、と。思わず伸びた背で炬燵から久しぶりに首から下が
出る。驚く口ウに俺はひらひらと手を振り隣にあるベットに入りな
がら欠伸をかみ殺し。

「まあ居るんならそれなりになんかやつてはもううけど。リストラされたってんなら金はねえんだろ？　しづらくなれば俺が出すから

1

「あ、今さお金はあるから俺出すよ。」「せん、

はあ、

「あ、ほら、一応俺勤めてたの大手だつたから給料良かつたんだ
その答えに壁を向いて寝ていた俺はごろんと口ウを向きなおす。

よ、それに家借りてなかつたからあんま使わなかつたし。それにこ

こ百年くらいは日本にいたからそれまでの貯金も・・・

「・・・じゃ、何で家借りるか買つかしなかつたんだ?ヒモ解雇さ

れたとき・・・」

金があるなら住むトコへりー。そう思つて訊いたのだがそれにも口ウはきよとんとして。

「あー・・・、だつてほら。俺吸血鬼だから。入つた」とのない家つて招かれないと入れないんだよね。」

「・・・内見すれば招かれたことになるんじゃねえの?」

「! ! ! !」

今気付いたのか・・・。

阿呆だ。思わず半眼になつた俺に口ウは真つ赤になつてあうづだののおだの言い訳を探している。阿呆だ。何百年生きようがきっとこいつはこんなだつたに違いない。俺はくああと欠伸をして寝返りをうつ。

「まあいいや。金があんなら家賃だの生活費だのの半額。それでしばらく居たらいいや。出て行きくなつたら出てつてくれて構わないから。」

「ほんとつ?いいの?」

背中から聞こえてくる嬉しそうな声にぱたと手を上げもがもぞと俺は布団に身を沈める。

「あー・・・、悪いが今日は炬燵で寝てくれ、テレビとか電源切つといてな。」

それだけ言つて俺は睡魔に誘われるままに目を閉じた。

「おやすみ、十夜くん。」

薄れていく意識の中できいたその声に、おやすみ、と。言葉として発せられたのか発せられなかつたのか。そう思つたときには俺はもう夢の中へと足を踏み入れていた。

そうして俺は。しばらくのおかしな吸血鬼と生活を共にするこ

とになる。友人の面倒に巻き込まれたり、吸血鬼の面倒に巻き込まれたりと。

全く騒々しい日々に笑いながら。

(後書き)

いやあ。3年前に書いたものなんですかごどね。
それを訂正もなしに放り込みましたけどね。
3年前に書いたものなのに、
・・・今どたいして変わってねえなとなんだかなかなかいります
よ(・・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5357ba/>

雪時々吸血鬼

2012年1月14日20時47分発行